

1

神さまからみた日本の祭り



久保田 裕道
KUBOTA Hiromichi

独立行政法人国立文化財機構 / 東京文化財研究所
無形文化遺産部 / 無形民俗文化財研究室長

日本には数えきれないほどの祭りが存在する。なぜこんなに祭りがあるのだろう。「祭り」は「祀る」という言葉に語源があり、神さまを迎えて供物をささげ、人々の幸福を祈るための行事であった。神さまを切り口に、祭りと日本文化について考える。

日本にはいくつ祭りがあるのだろうか？よく聞かれる質問だが、この問いには答えることができない。ときどき十萬といった説明がされるのを聞くことがあるが、これは社寺の数などから類推して算出しただけで、実際の祭りの数をカウントしたわけではない。

そもそも、何を以て祭りとするのかというのも難しいところだ。例えば神社であれば、毎月一日と十五日は「月次祭」という祭りをやっていたりする。秋には「新嘗祭」をやるし、正月には「歳旦祭」と、年中行事を数えたらきりがない。祭りといえば、お神輿や縁日を思い浮かべるかもしれないが、神職が祝詞を唱えるだけの祭りまで含めたら、その数は膨大になる。さらに、市民祭りや産業祭りなど、宗教が関与しない祭りもたくさんあるのだ。

しかしそんなことを言っていたのでは、祭りの話が始まらない。そこで、数はさておき、神さまとの関係から祭りを考えてみることにしたい。日本の神さまというのは、これまたたくさんいらっしゃる。「八百万の神」というくらいである。『古事記』『日本書紀』などの日本神話には、天照大神をはじめとして数多くの神名が登場しており、現在の神社では基本的にそうした神さまを御祭神として祀っている。けれども、それが日本人の考えてきた神さますべてではない。民俗学的にみていくと、もっと雑多な神さまが、あるいはもっとローカルな神さまがたくさん存在しているのである。ここでは、神さまを大きく3つのタイプに分けて祭りとの関係性を捉えてみることにしたい。

祖霊神の祭り

まずは「祖霊神」である。祖霊神とは、祖霊すなわちご先祖さまが神さまになるということ。そしてその神さまは、どこか遠い場所ではなく、人々が暮らす地域の近くにある山におわすというのだ。人は亡くなるとホトケになる。亡くなって一周忌、三回忌、七回忌といわゆる年忌供養をおこなっていくわけだが、33年とか50年あたりを過ぎると、もうご先祖さまの仲間入りをさせようということになる。判りやすいところでは、仏壇にある位牌を、パーソナルなものから、先祖の位牌にまとめてしまうのである。お墓に行けば、通常墓石の後ろに「卒塔婆」と呼ばれる細長い板が立てられているが、これを「うれつき塔婆」という生木の卒塔婆にするのもこのときである。こうしたご先祖さまの仲間入りをさせることを、「弔いあげ」と称した。

この祖霊神は、さきほど述べたように子孫が暮らす地域に近い山にいたのだと考えられた。今でいう里山のようなところだろう。なにも「祖霊神でござい」というわけではないが、様々な言い伝えや風習を調べてみると、どうもそういうことが言えそうなのである。そして、里で暮らす人々は、春になると稲作の準備を始める。特に重要なのは田植えだ。その際に山から神さまをお招きして、田の神として稲作の面倒をみてもらうことになるのだ。

だから3～6月のころの年中行事には、実は田の神を招くための準備という行事が多い。例えば3月3日のひなまつり。これは、本来は人形にその人の穢れを移して、川や海に流し去るという行事であった。なぜ穢れを流さなければならないのかというと、田の神を迎えるために



写真1 ユネスコの無形文化遺産にもなった「壬生の花田植」(広島県北広島町)

身を清めなければいけないのである。また、この頃になると潮干狩りに出かける。これも本来は海で身を清めることから始まっている。桜のお花見だって、かつて山に籠もった名残とも、桜が稲の魂を宿す花だからこそ愛でたのだともいわれる。さらには、5月5日の端午の節供。節供自体は大陸からもたらされた文化だが、例えば鯉のぼりを立てる風習は、神さまが降りてくる柱を立てるのが本来の意義だ。なぜ神さまを降ろすのかといえば、それこそが田の神を招くためなのである。

このように神さまを招いておこなう田植えは、まさに祭りであった。いまでも例えば広島県に行くと、「花田植」と呼ばれるユネスコの無形文化遺産にもなっている行事がある。田んぼの中で太鼓を叩きながら、飾り立てられた牛たちとともに早乙女たちがそれは賑やかに田植えをおこなうのだ。早乙女というのは、田植えをする女性一般を指すが、なぜ女性が田植えをするのかといえば、田の神さまと結婚させることで、子どもである米がたくさん生まれるという結



写真2 大阪でおこなわれる田植えの祭り「住吉の御田植」(大阪府大阪市)

果を願うのだ。

この後、収穫までさまざまな行事や祭りが続くことになるが、収穫が終わると田の神は山に帰って山の神になる。つまり、神さまは春祭りで山から下りてきて、秋祭りで山に帰っていくということになる。これが祖霊神の信仰の根幹だといえよう。ただし、それは祖霊信仰という教義



写真3 大晦日に家を訪れた「トシドン」
(鹿児島県薩摩川内市)



写真4 冬に夜を徹しておこなわれる「花祭」に登場する鬼もまた来訪神(愛知県東栄町)

が、それに基づいて春秋で山と里を往来する信仰体系があるということではない。あくまでも、日本各地の祭りを分析すると、そんな傾向がみえるのではないかという話に過ぎないのだ。例えば、茨城県の筑波山では春に神輿が山から下り、秋に山へと上っていく祭りがある。祭りではないが九州の河童の伝説は、春は山から下りてきて河童となり、秋は山に上って山童になるというものだ。河童というのは、水神が零落した姿だともいわれるため、まさにこれも祖霊信仰の話に重なってくるのだ。

遠くから来る神さま

さて、山から里へ神を迎える祭りは、春秋のほかにもう一度機会がある。それは正月である。暮れの正月準備の際に「松迎え」と称して、里山に門松を採りに行く。現在は多くの場合お店で買ってくるのであろうが、本来は神さまのいる里山から松を採ってくることで、それが神さまの宿のアイテムになった。この神さまというのは、お正月にやってくる神さまということで、「歳神」と呼ばれる。つまり祖霊神は、歳神さまの一面もあるのだといえよう。

けれどもお正月にやってくるのは、祖霊信仰にもとづく歳神ばかりではない。普段は近くにいないけれど、正月だけにやってくる神さまもいるのだ。それが、昨年ユネ

スコの無形文化遺産にも選ばれた「来訪神」ということになる。

来訪神という存在を定義するなら、年に一度やってきて幸せをもたらしてくれる神さまということになろう。代表的存在として、秋田県のナマハゲがいる。ご存知、大晦日に男鹿半島の家々を訪れ、子どもたちを恐怖に震え上がらせる、あの存在だ。いや、あれは鬼ではないのかと不思議に思う方もいるだろうが、鬼ではない。ナマハゲの語源は、ナマメとかナモミと呼ばれる火ぶくれをはぎ取るという、ナマメ剥ぎ、ナモミ剥ぎから来ている。東北から北陸にかけての日本海沿岸には、そのような名で呼ばれる類似の行事も伝えられているのだ。火ぶくれというのは、寒い寒いと仕事もせずに火にばかりあたっているところなので、怠け者をこらしめに来るとい話になっているが、もとを正せば、火ぶくれに代表されるような身についた穢れを取り去って、清々しく新年を迎えることができるようにしてくれるのが、ナマハゲ本来の目的であったのだ。

ナマハゲに似た行事が、鹿児島県の西の沖に浮かぶ甕島に伝わっている。これをトシドンというのだが、トシドンもナマハゲと同様に、大晦日の晩に子どもたちを叱りに来る。子どもたちにとって、それは怖い存在なのだが、しっかりと受け答えをすれば、最後に餅が貰える。この餅のことをトシモチというのだが、これは実はお年



写真5 祇園祭から広まった山車の夏祭り「西宿諏訪神社例祭」
(東京都東村山市)



写真6 盆踊りもまた悪霊を追い出す祭り「松山踊り」
(岡山県備中高梁市)

玉の原型だと考えられるのだ。丸いお供え餅というのは、霊魂の象徴ともされる。トシドンがそれを与えるというのは、つまりは新たな霊魂をもらって、新たな年を迎えるということなのだ。

ちょっと怖いというのも特徴だが、遠くからやってきて新たな魂を与えてくれる、そんな祭りが正月近辺にはおこなわれるのである。ただし沖縄だけは気候が違うため、年中行事のサイクルがやや異なっている。夏から秋にかけて、こうした新たな年を迎える祭りがおこなわれており、そこに沖縄ならではの来訪神が登場しているのだ。

崇りをなす神さまの祭り

最後に挙げるのが、崇りをなす神さまの祭り。いままでの祭りとは、ちょっと違う。祭りをすることで、崇りを免れようというものである。ルーツは京都の祇園祭。政争の激しかった平安時代、無実を訴えながらも非業の最期を遂げた貴族たちが怨霊となって、京都にさまざまな災いをもたらすと考えられていた。この怨霊たちを「御霊」と呼び、それを鎮めるために始められたのが、祇園祭なのである。

また祇園祭がおこなわれるのは、夏。疫病が流行したり、天変地異が起こりやすい時期であり、そうした災いの原因も御霊にあるとされた。なにも怨霊だけではない。さまざまな疫病神たちが跳梁跋扈しており、それを追い出すために疫病神の総元締めのような存在である牛頭天王を祀った。牛頭天王というのは、もともとインドで仏教の聖地である祇園精舎を守る神さまであったが、日本にやってきてなぜか厄病神の親玉のようになってしまった。祇園の守護神だったので祇園社の名で京都に祀られ、御霊の祭りだから「祇園御霊会」、これが祇園祭の始まりとなる。

この御霊を追い払うためには、共通した祭りの方法がある。思いきり賑やかに、派手に騒がしく楽しく祭りをやったほうがよいのである。祇園祭があれだけ華やかにおこなわれるのはそのためであり、そこから派生した全国各地の夏祭りもまた、同様に賑やかだ。これもユネスコの無形文化遺産となった「山・鉾・屋台」の行事も、祇園祭から全国に広まっている。

夏祭りとは異なるが、盆踊りもまた同様の効果が期待されている。盆踊りは祖先の霊を供養するためでもあるが、同時に供養されない悪霊の類を追い出すための芸能でもあるのだ。だからこそ楽しく賑やかに踊って、最後は村境から悪霊に出ていってもらおうというわけである。いかにして災いから逃れるか、という願いは、千年前も現在も基本的には変わっていない。

祭りは日本文化の形

神さまから日本の祭りを分類してみると、おおよそこのように分けることができる。しかしもちろん、祭りはこれだけではない。長い歴史の中で地域ごとにさまざまな祭りが生み出され、変化を遂げてきた。それは日本文化の形そのものと言っていいだろう。

今秋には大嘗祭がおこなわれる。これは天皇が代替わりした際にのみおこなわれる新嘗祭を拡大した祭りであり、日本で最も古い祭りということもできる。その中でさまざまな儀礼がおこなわれるが、基本はこの稿でも最初のほうで述べた稲作の祭りなのである。またその中でおこなわれる芸能や宴会も、形を変えながら全国各地に広まったといえる。この機会に、祭りから日本文化をみつめなおしてみるのもいいかもしれない。

<写真提供>
写真1 今石みぎわ